《資料》

伝土佐光起筆「白描源氏物語色紙絵」（同志社大学所蔵）の紹介

岩坪　健

近年、本学の所蔵となった「源氏物語色紙」（函架番号721.2 T9418）は、その存在すら未だ学会には知られていない新資料である。本作品は紙本白描の色紙絵で五十四枚あり、各色紙に巻名や巻序を記した付箋などはなく、また極め札の類いもないが、すべて源氏物語絵で五十四帖揃いと仮定して論を進める。全色紙は黒塗りの箱に収められ、蓋の表には蓮の花と葉が金蒔絵、葉に置く白露は螺鈿、落款の「楽山」も蒔絵で施されている。箱書きはなく、新装であろう。

注目されるのは48早蕨（第四十八帖・早蕨の巻の意。以下同じ）と認められる図には、「土佐／常昭」と刻んだ白文方印の印章（縦二・一、横二・三センチ）が朱肉で押されている（図1）。常昭は土佐光起の法名で、これが本物であれば出家した延宝九年（一六八一）五月から没した元禄四年（一六九一）九月までの作になる。その当否はさておき、全図は同一人物の手になる、または同じ工房で制作されたと想定される。なお全図を本稿の巻末に掲載する。

本作は白描であるが、朱を差す個所が散見される。それは単衣（1桐壺・7紅葉賀など）、少年の唇（3空蟬）、篝火（19薄雲・27篝火）・焚き火（35若菜下）・松明（53手習）の炎、そして赤い糸（47総角）である。いずれも微量の朱が丁寧に塗られた、上品な差し色である。本紙はいずれも縦二三・八、横二二・六センチ、天地に金泥にて、すやり霞を引く。各図の紙背に糊付けの跡があり、屏風か画帖から剥がしたのであろう。48早蕨の裏にのみ、丁髷を結った顔を墨で描く（図2）。保存状態は概ね良好であるが、墨の汚れが1桐壺・7紅葉賀・13明石・36柏木に、縦の染みが10賢木・16関屋に、横の染みが26常夏・37横笛・38鈴虫に見られる。

以下、桐壺の巻から順に一図ずつ挙げていくが、場面を認定しがたい絵が散在する。例えば田口榮一氏が作成された「源氏絵帖別場面一覧」（秋山虔・田口榮一監修『豪華［源氏絵］の

世界　源氏物語』学習研究社、一九八八年所収）に掲載されていないものがある。それは35若菜下・47総角・52蜻蛉であるが、片桐洋一編『源氏物語絵詞』（大学堂書店、一九八三年）に採られていないのは47総角だけである。また作例が稀であるのは33藤裏葉・35若菜下・48早蕨、どの場面か判断に迷うのは3空蟬・35若菜下・39夕霧・42匂兵部卿・46椎本・52蜻蛉であるが、すべて前掲の『源氏物語絵詞』には見られる。その一方で定型化した土佐派の図も多くあるので、従来の形式を継承しつつ新しい場面を模索するという、伝統に革新が交じった逸品と言えよう。

五十四図に描かれた男女の比率を調べると、女性のみが二図（44竹河・47総角）しかないのに対して、男性のみは二十一図[1]にも及び偏りが見られる［佐野みどり氏の御教示による］。その中には12須磨・13明石・15蓬生のように当該巻を代表する名場面がある一方、前掲の珍しい図も含まれる。あえて女性不在の場面を取り上げたのは、注文主の意向によるのであろうか。今後の研究に俟ちたい。

凡　例

一、まず各帖の巻数と巻名を記す。例えば「1桐壺」は第一帖・桐壺の巻を表す。次に絵の場面を簡単に説明して、それに該当する箇所を新編日本古典文学全集の冊数と頁数で示す。例えば（①三九頁）は第一冊の三九頁を意味する。

一、よく引用する資料は略号で表記する。

○『絵詞』＝片桐洋一編『源氏物語絵詞』（大学堂書店、一九八三年。現在は大阪公立大学学術情報センター蔵）。

○『豪華』＝秋山虔・田口榮一監修『豪華［源氏絵］の世界　源氏物語』（学習研究社、一九八八年）。

○『集成』＝佐野みどり編『源氏絵集成【図版編】』（藝華書院、二〇一一年）。

○「光吉久保惣」＝土佐光吉筆「源氏物語手鑑」（一六一二年、和泉市久保惣記念美術館蔵）。当館編『土佐派源氏絵研究』（二〇二〇年）所収。

○「土佐久保惣」＝土佐派「源氏物語色紙貼交屏風」（江戸時代前期、和泉市久保惣記念美術館蔵）。当館編『土佐派源氏絵研究』（二〇二〇年）所収。

○「光吉京博」＝土佐光吉筆「源氏物語画帖」（桃山時代、京都国立博物館蔵）。『源氏物語画帖』（勉誠社、一九九七年）所収。

○「承応版」＝慶安三年（一六五〇）跋・承応三年（一六五四）版絵入り「源氏物語」。吉田幸一『絵入本源氏物語考』（青裳

堂書店、一九八七年）所収。

○「甫正九曜」＝甫正筆「源氏物語画帖」（江戸時代中期、九曜文庫蔵）。

以上の作品の中で最も本画帖に似るのは「光吉久保惣」で、十二巻（第5 7 11 12 14 18 19 20 23 34 43 53帖）に及ぶ。

1桐壺。右大弁が源氏を鴻臚館に連れて行き、高麗人に観相してもらう（①三九頁）。鴻臚館の石床の輪郭が「く」の字で、階と車が平行に並んでいる構図は、土佐光起筆「源氏物語画帖」（一六五八年、個人蔵。『豪華』所収）に見られる。

2帚木。木枯しの女の家で、殿上人が笛を吹く。（①七八頁）。「庭の紅葉」（①七九頁）も女の姿もなく、殿上人が庭に立っている点は「承応版」と伝住吉如慶筆「源氏物語扇面画帖」（十七世紀、九曜文庫蔵）に似る。

3空蟬。小君が源氏を「やをら入れたてまつる」（①一二三頁）の場面、『絵詞』の「ごうちはてゝふす。小君をたよりにしのひ入」の箇所か。「甫正九曜」は閉じた妻戸の前に小君、欄干のそばに源氏が立ち、詞書は「この子もおさなきを（中略）かうしたゝきのゝしりていりぬ」（①一一八頁）。伝土佐光成筆「源氏物語画帖」（大英博物館蔵）は閉じた妻戸の前に二人が向かい合い、詞書は「ひるよりにしの御かたの（中略）すたれのはさまに入給ぬ」（①一一九頁）。

4夕顔。車内にいる源氏が夕顔の花を所望して、五条の家の女童が扇に載せて随身に渡す。（①一三六頁）。類例、「土佐久保惣」、「甫正九曜」、伝土佐光信筆「源氏物語画帖」（九曜文庫蔵。『見る・知る・読む　源氏物語』勉誠出版、二〇一三年）。

5若紫。北山の僧都の坊に、源氏が泊まる（①二一五頁）。「滝のよどみもまさりて音高う聞こゆ。」（同頁）の滝が描かれる。類例、「光吉久保惣」、土佐光則筆「白描源氏物語画帖」（江戸時代初期、バーク・コレクション蔵。『豪華』）、伝土佐光成筆「源氏物語画帖」（大英博物館蔵）。

6末摘花。源氏は末摘花の演奏を聞いて（①二六九頁）、部屋を出て「透垣（すいがい）のただ少し折れ残りたる隠れの方に立ち寄り」（①二七一頁）、頭中将と出くわす。源氏は「内裏（うち）より」（同頁）直接、末摘花邸を訪れたので冠直衣姿だが、頭中将は「狩衣姿」（同頁）に烏帽子をかぶる。

7紅葉賀。源氏が元旦の朝拝に参内する前に、自邸の二条院に引き取った若紫の部屋を訪れると、「雛遊（ひひな）び」（①三二〇頁）をしていた。源氏の立ち位置は異なるが、「光吉京博」「光吉久保惣」に似る。源氏の位置が同じなのは土佐光則筆「源氏物語画帖」（十七世紀、任天堂蔵）。

8花宴。源氏、朧月夜と再会（①三六六頁）。土佐光則筆「源

氏物語画帖」（十七世紀、徳川美術館蔵）と「甫正九曜」の源氏は御簾をかぶり、上半身だけ室内に入り込んでいる。

9葵。源氏は賀茂の祭に行く前、若紫の髪を自ら削ぐ（②二七頁）。源氏の右側には葵の葉、左側には水差しと角盥（つのだらい）が置かれ、後ろ姿の若紫は珍しい。

10賢木。源氏、野宮にいる六条御息所を訪れ、榊を差し入れる（②八七頁）。「黒木の鳥居」（②八五頁）が見当たらないが、「小柴垣」（同頁）の端が丸太のように見えるので、それが鳥居なのかもしれない。「土佐久保惣」も本図と同じ描き方である。

11花散里。車内の源氏、昔の恋人が弾く琴の音を聞き、惟光を使わせる（②一五四頁）。類例、「光吉久保惣」。

12須磨。須磨のわび住まいにて源氏、海を眺める（②二〇〇頁）。物語本文の「前栽の花いろいろ咲き乱れ、おもしろき夕暮に、海見やらるる廊に出でたまひて、たたずみたまふ」（同頁）、「沖より舟どものうたひののしりて漕ぎ行く」（②二〇一頁）、「雁の連ねて鳴く」（同頁）、「月」「十五夜」（②二〇二頁）に合う。類例、「光吉久保惣」「甫正九曜」。

13明石。源氏、初めて明石の君を訪れる（②二五五頁）。画面の左上に「（八月）十二三日の月」（同頁）が描かれる。類例、「土佐源氏物語色紙絵」（江戸時代初期、堺市博物館蔵。『豪華』）。

14澪標。源氏、明石から帰京して初めて花散里を訪ねる（②二九七頁）。「水鶏（くひな）のいと近う鳴きたる」（②二九八頁）の水鶏が庭にいる。類例、「光吉久保惣」。

15蓬生。源氏、明石から帰京して初めて末摘花を訪ねる（②三四八頁）。定型化した図様。

16関屋。常陸から帰京する空蝉と、石山寺に参詣する源氏が逢坂の関ですれ違う（②三六〇頁）。画面の右下は源氏の車。左上は「車どもかきおろし、木隠れにゐかしこまりて（源氏を）過ぐしたてまつる」（同頁）空蝉の一行。類例、「光吉京博」。

17絵合。源氏は養女にした斎宮女御に渡す物語絵を、紫の上と選ぶ（②三七七頁）。紫の上の前に広げられた絵は、源氏が須磨・明石で描いた「旅の御日記」（同頁）か。紫の上が見る絵は本図のように床の上に置くものと、源氏が広げて両手で持つものとに大別される。類例、伝土佐光元筆「源氏物語画帖」（桃山時代、出光美術館蔵）。

18松風。源氏、桂の院にて小鷹狩の若殿たちをもてなす（②四一八頁）。源氏の前には杯を載せた三方を置く。類例、「光吉久保惣」「土佐久保惣」。

19薄雲。源氏、大堰にいる明石の君を訪れ、「篝火ども」（大堰川の鵜飼舟の篝火）が見える（②四六六頁）。類例、「光吉久保惣」。

20朝顔。雪の降る夕暮れに源氏が朝顔の姫君を訪れると、門の錠が錆びついてなかなか開かない（②四八一頁）。類例、「光吉久保惣」、伝住吉如慶筆「源氏物語手鑑」（寛永年間（一六二四～四四年）末頃、個人蔵。『見ながら読む日本のこころ　源氏物語』『ビジュアル選書　源氏物語』所収）。

21少女。夕霧、幼馴染の雲居雁との仲を引き裂かれ、会いに来ても襖が開かない（③四八頁）。画面右上に「雁の鳴きわたる」（同頁）が描かれ、室内の高坏燈台が夜を表わす。類例、土佐派「源氏物語色紙絵」（江戸時代初期、京都民芸館蔵。『豪華』）、住吉如慶筆「源氏物語画帖」（一六六三～六六年、大英図書館蔵）。

22玉鬘。源氏、養女にした玉鬘に初めて会う（③一二九頁）。源氏に顔を見られぬよう扇で隠しているのは、「わりなく恥づかしければ、側みておはする」（同頁）玉鬘、灯心をかきあげているのは「右近かかげて」（③一三〇頁）の右近。後ろ姿の女性も女房。類例、土佐光起筆「源氏物語画帖」（個人蔵。『豪華』）。

23初音。明石の君が娘に贈った松に鶯を、源氏が見る（③一四五頁）。祝いの膳には六皿、三方には鶯を付けた五葉松を載せ、酒を入れた銚子は女房が手にする。ちなみに「光吉久保惣」は、六個の高坏に食物を載せる。

24胡蝶。秋好中宮が六条院の秋の御殿にて、季の御読経を始めた。紫の上が供養の志として用意した、鳥の装束を着て桜を挿した銀の花瓶を持つ四人の少女と、蝶の装束に山吹を活けた金の花瓶を持つ四人の少女が「鳥の楽」（③一七二頁）を舞う。画面の左側が鳥、右側が蝶。簀子で見物しているのは「殿上人など」（③一七一頁）。船を描かない点では「土佐久保惣」に似る。

25蛍。六条院にある「馬場殿」（③二〇五頁）にて行われた競馬。馬場の柵が水平に描かれ、遅れている騎手が腰を浮かしている点は、伝住吉如慶筆「源氏物語扇面画帖」（九曜文庫蔵）と共通する。

26常夏。内大臣は我が子と認知して引き取った近江の君が、侍女の五節の君と「双六」（③二四二頁）に興じるさまを見る。類例、「甫正九曜」、伝土佐光成筆「源氏物語画帖」（大英博物館蔵）。

27篝火。源氏は養女にした玉鬘に「御琴など」を教えていたが、庭先の「篝火のすこし消え」かけていたので、「御供なる右近大夫」（③二五六頁）に命じて明るく焚かせた。

28野分。夕霧、明石の姫君を訪れ、雲居雁に手紙を書く（③二八三頁）。室町時代の屏風（浄土寺・藤岡家・永青文庫）には見られるが、江戸時代の作例は稀。

29行幸。大原野への行幸に参加せず自邸（六条院）に留まった源氏に、勅使が「雉一枝」を差し出す（③二九三頁）。帝の顔は隠して描かないことが多いので、源氏の顔が見えないのも帝に準じるか。類例、土佐派「源氏物語色紙絵」（堺市博物館蔵。『豪華』）、「甫正九曜」。

30藤袴。夕霧は、持っていた「蘭の花」（藤袴の異名）を玉鬘に差し出す（③三三二頁）。物語では夕霧は簾の外にいて藤袴を「御簾のつまよりさし入れて」、玉鬘の「御袖を引き動かしたり。」（同頁）とあるが、本図と住吉如慶筆「源氏物語画帖」（大英図書館蔵）、伝土佐光信筆「源氏物語画帖」（九曜文庫蔵）の夕霧は室内に入りこんでいる。

31真木柱。玉鬘の元へ行く髭黒大将に、北の方が香炉の灰をかける（③三六五頁）。「侍所に人々声して、『雪すこし隙あり。』」（同頁）とあるように、庭の木には雪が降り積もり、車の側には供人が待機している。几帳が人物に対して大きすぎるが、その描き方は「源氏物語色絵画帖」（十七世紀後半、海の見える杜美術館蔵）や伝土佐光則筆「源氏絵鑑帖」（寛永年間（一六二四～四四年）末期、宇治市源氏物語ミュージアム蔵）にも見られる。

32梅枝。蛍宮が源氏の邸宅（六条院）から帰る（③四一二頁）。本図は物語本文の「（源氏から蛍宮への）御贈物に、みづからの御料の御直衣の御よそひ一領、手ふれたまはぬ薫物二壺添へて、御車に奉らせたまふ。」（同頁）に合う。先頭を歩くのは蛍宮。類例、「光吉京博」。

33藤裏葉。冷泉帝と朱雀院が六条院に行幸する（③四五九頁）。「東の池に舟ども浮けて、御厨子所の鵜飼の長、院の鵜飼を召し並べて、鵜をおろさせたまへり。」（同頁）に合う。それは東の御殿にある「馬場殿」に着いた冷泉帝と朱雀院が、南の御殿に移る途中の一興として供された。ということは室内にいて顔が見えない人物は、客人を待つ源氏か。『絵詞』にはあるが、作例は住吉家粉本「源氏物語画帖集」（東京藝術大学大学美術館蔵）をはじめ、伝住吉如慶筆「源氏物語扇面画帖」（九曜文庫蔵）や「源氏物語画帖」（十七世紀後半。三浦敬任氏「［作品紹介］個人蔵「源氏物語画帖」について」、『奈良県立美術館紀要』三五、二〇二一年三月）など少ない。

34若菜上。玉鬘は源氏の四十の賀を祝い、二人の子息を連れて六条院に参り、若菜を進上する。（④五五頁）。源氏・玉鬘と二人の子の前には皿を載せた三方、女房の前には酒を入れた銚子が置かれる。「正月二十三日」（同頁）で、庭には梅の花が咲いている。類例、「光吉久保惣」。

35若菜下。源氏、住吉社に参詣して神楽を奉納する（④一七四頁）。「庭燎も影しめりたるに、なほ「万歳、万歳」と榊葉をと

り返しつつ、祝ひ」（④一七五頁）とあり、庭に篝火を焚いて神楽をする。本図の人長（神楽の舞人の長）が手に持つのは輪榊、楽人の楽器は時計回りに横笛、笙、篳篥、銅拍子。『絵詞』にあるが作例は稀で、「承応版」に同じ場面がある。なお楽器などは高橋美都氏の御教示による。

36柏木。病床にいる柏木は、女三の宮に仕える侍従に手紙を託す（④二九一頁）。隣室には大臣（柏木の父）が葛城山から招いた修験者に加持を頼む（④二九二頁）。この異時同図法は室町時代の屏風（浄土寺・藤岡家・永青文庫）に見られ、構図は土佐派「源氏物語色紙画帖」（十六～十七世紀、出光美術館蔵。『集成』所収）、岩佐勝友筆「源氏物語図屏風」（江戸時代、出光美術館蔵）、伝住吉如慶筆「源氏物語手鑑」（20朝顔に掲出）、伝土佐光信筆「源氏物語画帖」（九曜文庫蔵）、「甫正九曜」に似るが、本図のように柏木が仰向きに寝ているのは珍しい。

37横笛。夕霧は一条宮を訪れ、落葉の宮が「箏の琴」（④三五五頁）を弾いた後、柏木遺愛の笛を譲られて吹く（④三五七頁）。本図では合奏しているように見えるが、これも前巻と同じく異時同図法か。類例、岩佐勝友筆「源氏物語図屏風」（出光美術館蔵）、伝住吉如慶筆「源氏物語手鑑」（36柏木に掲出）。

38鈴虫。源氏は出家した女三の宮への未練の気持ちを和歌に詠む（④三七六頁）。本図は「（源氏は）御硯に（筆先を）さし濡らして、香染なる御扇に書きつけたまへり。」（同頁）、「夏ごろ、蓮の花の盛り」（④三七三頁）に合う。硯箱の横にあるのは毛髪を束ねたように見えるが、硯箱に掛ける飾り紐か。類例、土佐光起筆「源氏物語画帖」（個人蔵。『豪華』）、伝住吉如慶筆「源氏物語手鑑」（36柏木に掲出）。

39夕霧。夕霧、小野に住む落葉の宮を訪れる（④四四七頁）。当巻で鹿が登場するのは三箇所あり（四〇八・四四八・四五一頁）、夕霧が屋外にいるのは四四八頁のみ。当該場面はよく絵にされ『絵詞』にもあるが、多くは到着した夕霧が簀子に立ち、扇をかざして顔を隠している。その絵には鹿のみならず「山田の引板」（④四四八頁）も添えるが、本図には見当たらない。

40御法。紫の上は二条院にて法華経千部供養を行ない、源氏と陵王の舞を見る（④四九七頁）。

41幻。源氏は自邸で仏名を催し、退出する導師に盃を賜る（④五四八頁）。類例、伝土佐光元筆「源氏物語画帖」（十六～十七世紀、京都国立博物館蔵）、土佐光則筆「源氏物語画帖」（任天堂蔵）、伝土佐光信筆「源氏物語画帖」（九曜文庫蔵）。

42匂兵部卿。夕霧が自邸の六条院にて賭弓の還饗を開き、東遊の「求子」が舞われる（⑤三四頁）。舞人の前には松をあしら

った州浜、烏帽子をかぶった人の前には銚子を置く。「御前近き梅」（同頁）も描かれ、『絵詞』にも採られている。ちなみに版本の挿し絵にも似た図が8花宴の巻にあり、それは源氏か頭中将が舞う場面（①三五四頁）か。

43紅梅。大納言が匂宮に手紙を書き、子息の大夫の君に託す（⑤四九頁）。本図で簀子に置かれたのは、「軒近き紅梅」（⑤四七頁）を「一枝折りて」（⑤四八頁）匂宮に差し上げるもの。類例、「光吉久保惣」。

44竹河。玉鬘の姫君たちが庭の桜を賭け物にして囲碁を打ち、勝者に仕える女童が散った花びらを拾い集める（⑤八一頁）。箱を持つ三人の童女は、土佐光則筆「白描源氏物語画帖」（江戸時代初期、フリア美術館蔵）と「甫正九曜」に見られる。

45橋姫。薫は馬で、宇治に住む八の宮を訪れる（⑤一三五頁）。太鼓橋に柳が宇治橋を表わす。類例、伝住吉如慶筆「源氏物語手鑑」（個人蔵。『豪華』）、伝土佐光信筆「源氏物語画帖」（九曜文庫蔵）。

46椎本。宇治にある夕霧の別邸（⑤一七一頁）か、その対岸にある八の宮邸（⑤一七三頁）にて、薫たちが管絃の宴を催す。物語に「鹿」「牡鹿」が登場するのは、別の場面（⑤一九三～一九五頁）。

47総角。宇治の大君と中の君が、八の宮の一周忌の用意をしている（⑤二一三頁）。本図に描かれた道具（赤糸を巻き付けた一本の棒）は「たたり」（同頁）か。ただし『和漢三才図絵』に描かれた「たたり」は「承応版」のと同じで、三本の棒に糸を絡ませる。本図と同じ道具は狩野氏信・狩野秀信筆「源氏物語画帖」（九曜文庫蔵）に見られる。

48早蕨。宇治の大君に先立たれた薫は匂宮を訪れ、嘆きを訴える（⑤三四八頁）。物語では、「（匂宮は）端近くぞおはしましける。箏の御琴掻き鳴らしつつ、例の、御心寄せなる梅の香をめでおはする、（薫は）下枝を押し折りて参りたまへる」（同頁）の箇所に該当し、その場面は『絵詞』にも採られている。類例、土佐光則筆「白描源氏物語画帖」（フリア美術館蔵）。

49宿木。匂宮は琵琶を弾き、中の君と和歌を詠み合う（⑤四六五頁）。匂宮は「なつかしきほどの御衣どもに、直衣ばかり着たまひて、琵琶を弾きゐたまへり。」、身重の中の君は「脇息に寄りかかりて」（同頁）、また庭には「尾花の、物よりことに手をさし出でて招く」（同頁）の物語本文に本図は合う。類例、土佐派「源氏物語色紙画帖」（出光美術館蔵。『集成』）。

50東屋。薫は三条の小家に隠れ住む浮舟を訪れ、一夜を語らう（⑥九三頁）。薫と浮舟は室内に、「朝ぼらけに見れば、物戴きたる者の鬼のやうなる」（同頁）は通りにいる。類例、伝住吉如慶筆「源氏物語手鑑」（個人蔵）、伝土佐光信筆「源氏物語画

帖」（九曜文庫蔵）。

51浮舟。匂宮、浮舟を連れ出し、宇治川を舟で渡る（⑥一五〇頁）。

52蜻蛉。薫、浮舟の失踪について右近に尋ねる（⑥二三六頁）。『絵詞』と「承応版」にはあるが作例は稀。前巻で匂宮が侍従と会う場面（⑥一九〇頁）にも似るが、そこでは「山がつの垣根のおどろ葎の蔭に、（匂宮は）障泥といふものを敷きて」（同頁）いた。本図には「障泥」（馬の鞍の下に垂らす毛皮製品）は見当たらず、「（薫は）いとしげき木の下に、苔を御座にてとばかりゐたまへり。」（同頁）である。

53手習。横川の僧都、宇治院の裏手で倒れている浮舟を見つける（⑥二八一頁）。類例、「光吉久保惣」。

54夢浮橋。浮舟、薫の手紙を見る（⑥三九一頁）。「尼君、御文ひき解きて見せたてまつる。」（同頁）とあり、広げた手紙の前に浮舟、その横に妹尼、簀子に手紙を運んだ小君がいる。ただし物語では、小君は異父姉の浮舟に会えなかった。類例、「土佐久保惣」。

［付記］

本稿は、「近世から近代に至る日本伝統文化の分野横断的研究とデータサイエンス教材への活用」（同志社大学人文科学研究所第21期研究会第6研究（二〇二二～二〇二四年度）、科学研究費助成事業基盤研究（C）課題番号20K12565、二〇二〇～二〇二二年度）における研究の一部であり、また同志社大学宮廷文化研究センターの事業の一環である。

注

（1）男性のみの二十一図は第1 2 3 5 12 13 15 18 20 25 29 32 33 35 39 41 42 43 45 46 48帖である。それと女性のみの二図以外はすべて男女が登場するが、少年と僧は男性、少女と尼は女性と見なした。たとえば54夢浮橋は少年と尼のみで、これも男女を描いた図と判断した。

（第21期第6研究会による成果）

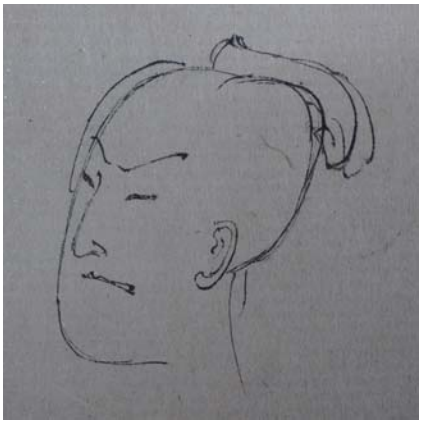

図2

図1

2 帚木

1 桐壺

4 夕顔

3 空蝉

6 末摘花

5 若紫

8 花宴

7 紅葉賀

10 賢木

9 葵

12 須磨

11 花散里

14 澪標

13 明石

16 関屋

15 蓬生

18 松風

17 絵合

20 朝顔

19 薄雲

22 玉鬘

21 少女

24 胡蝶

23 初音

26 常夏

25 蛍

28 野分

27 篝火

30 藤袴

29 行幸

32 梅枝

31 真木柱

34 若菜上

33 藤裏葉

36 柏木

35 若菜下

38 鈴虫

37 横笛

40 御法

39 夕霧

42 匂宮

41 幻

44 竹河

43 紅梅

46 椎本

45 橋姫

48
早蕨

47
総角

50
東屋

49
宿木

52
蜻蛉

51
浮舟

54 夢浮橋

53 手習